

2024年度（令和6年度） 自己評価書

2025年3月24日

学校法人北海道カトリック学園 旭川藤星高等学校

1 本年度の重点目標

- (1) 生徒の自立と自律を育むために「手をかけ、心をかけて、丁寧に育てる」指導体制の確立
- (2) 教職員チームの組織的な業務遂行、協働と匡弼という学校文化の醸成
- (3) 生徒・保護者・地域からの大きな信頼を得る安心・安全な学校づくり
- (4) 「良き伝統の継承と必要な変化」これまでに培ってきた伝統の継承と予測不能な状況へのしなやかな対応を臨機応変にできる組織力

2 本年度の経営方針

- (1) 多様な学力、多様な進路希望へ対応した藤星のカリキュラムマネジメントの実践
- (2) 未来を創造する進路指導
- (3) 「チーム藤星」として高い同僚性をもった一体感ある職場の構築
- (4) 保護者・地域から絶大な信頼を得る学校づくり

3 評価方法

評価方法は、次のとおり4段階とする。

- | | |
|-----------------------|----------------|
| A 十分に達成されている。 | B 達成されている。 |
| C 取り組まれているが、成果が十分でない。 | D 取り組みが不十分である。 |

4 自己評価結果

分野	評価項目		自己評価	
			達成状況	改善の方策
学習指導 教育課程	1	授業で「教える」から「学ぶ」への転換と、主体的・協働的な学びが進展している。	C	授業において教員は、学習者の学びを深める授業展開を意識し、多様な評価をふまえた授業実践が出来るよう研修をすすめる。
	2	それぞれ3つのコースが特色ある教育課程のもと学習活動が行われている。	C	各コースの特色ある取り組みについて、その成果を検証し、高いレベルに持ち上げる目標設定を行うとともに、コース間の相互理解に努める。
進路指導	3	各学年が生徒の進路実現をするための指導を組織的に行っている。	C	進路指導計画に基づき、学年進路担当を中心に主体的な計画運営を図り、これを基に学年団が生徒の実態に合わせ適宜必要な指導を行う。
	4	進路実現のための具体的な対応（講習・模試・進路指導等）を十分に行っている。	B	進路シラバスを活用し、出口の目標に照準を合わせた3年間の学習指導と進路指導を連動して積極的に取り組む。
生徒指導	5	本校の生徒指導は、自立、自律のための指導になっている。	C	PDS手帳の効果的な活用推進により、PDCAの考え方をすべての生徒が理解し、実践するように指導を徹底する。
	6	生徒の問題行動が発生したときの教員の指導体制、連携、役割分担は明確になっている。	C	問題行動の予防に力を入れるとともに、発生時の対応における校内体制を生徒指導部を中心に整備する。
安全 保健	7	生徒の健康管理と健康増進のための対応が行われている。	B	学年・HR担任と養護教諭との情報共有のもと、日常の生徒の健康・心のチェックを実践する。
安全 管理	8	必要な危機管理体制を整えている。	C	状況に応じて危機管理マニュアルを見直しなど、点検、検証を行うことで教職員の危機管理意識を醸成する。
特別 教育 支援	9	教育支援、特別支援体制は整備されている。	C	クラス担任・教科担任は教育支援コーディネータやカウンセラーとの連携を深め、支援体制の整理と強化を図る。

組織運営	10	各分掌は相互に連携を図りながら課題解決に努めている。	C	運営会議等の場面だけでなく、日常的に部長・主任を中心にコミュニケーションの向上を図り、課題解決に協働してあたるよう努める。
	11	PDCAサイクルのもとで効果的に教育活動が行われている。	C	常にPDCAサイクルを意識し、反省会議において問題点、課題を明確化させ柔軟に改善を図る体制を構築する。
研修	12	学校課題を解決するための研究、研修が取り組まれている。	C	学校全体を「研修の場」と位置付け、校内・校外での研究を積み重ね研鑽するとともに、個々の教員が常に学ぶ意識を持てるよう環境を整備する。
学校評価・教育目標	13	建学の精神や校訓を活かした教育活動をしている。	B	全校朝礼や授業・学校行事等などにおいて、建学の精神に触れる機会を増やし、具現化するよう努める。
	14	今年度の重点目標を達成すべく教育活動が行われている。	C	年度の重点目標を学年、コースや分掌の教育計画作成に反映させながら教育実践ができるよう努める。
情報提供	15	学校と保護者はスムーズに連携を行っている。	B	日常的に学校ホームページやBLENDを活用して学校情報を積極的に発信することで、学校の現状を周知する努力をする。
等保護者・活動連携・地域・募集	16	本校の情報は、中学校教員、中学生や保護者、地域住民向けに効果的に発信されている。	C	学校ホームページ、広報誌などの媒体をさらに工夫して発信する。タイムリーな情報発信を心がける。
	17	本校の特色は効果的に発信され、生徒募集活動につながっている。	C	本校の特色について効果的なPRを模索し、他校との差別化で中学生から選ばれる学校を目指す。
施設設備	18	本校の教育関係の施設・設備は充実している。	C	ICT教育に対応した設備の充実、その他経年劣化した備品の入れ替えを行い学習環境の改善に努める。

5 総合的な評価結果

総合評価	理 由
C	アクティブラーニングの先駆けとして取り組んできた「教える」授業から、生徒が「自ら学ぶ」授業への転換は進んだが、教員の入れ替えに伴いこの授業スタイルの意義や在り方について再確認のもと共通認識を持つ必要がある。生徒が望む進路実現のための学びや学習への取り組みについて、教員個々の授業力の向上策を模索するとともに各教科における効果的な教員配置について今後十分に検討継続していく必要がある。 進学面では、122名の卒業生に対し、北海道大学1名をはじめ、国公立大学の合格者数は19名(3/13現在)であった。ここ数年継続して、進学コースからも国公立大への合格者がいることから、コース独自の進路の取り組みや「受験部」の活動が成果となって現れてきていると考えられる。私立大学についても、立教大学1名、津田塾大学1名、日本大学1名、駒沢大学2名、獨協大学2名、南山大学1名、立命館アジア太平洋大学1名が合格するなど積極的に道外への進学を志す生徒も多く、学校全体として進学指導の質を上げていけるよう更なる努力をしたい。 募集活動においては丁寧な学校行事やコース行事、部活動などの取り組みや卒業生の進学実績などの説明を通じ他校との差別化を図った。イベントの参加の実人数も、中学生、保護者、教員をはじめとする教育関係者への周知が進んだおかげで前年度と同じ規模となった。しかしながら、2025年度入試においては、本校の志願者数が前年度比減となり、入学者数は定員140名に対し108名と厳しい結果となった。引き続き藤星の良さを伝える流れは継続しつつ、さらに本校生徒の学校活動を充実させ進路実績を向上させることや男子生徒の学校内での活動の活発化をめざすとともに、このことを効果的に発信する募集活動の充実に教職員一丸となって取り組んでいきたい。 藤星高校が共学化7年目を迎えるにあたり、過去の取り組みを元に新たに得た教育知を生かし、新たな学びや学校活動のあり方についても継続して模索し実践していきたい。